

---

## 《論文》

# プレスナーの哲学的人間学における位置性の理論（1）

奥 谷 浩 一

---

## はじめに

ヘルムート・プレスナー Helmuth Plessner(1892~1985)がその主著『有機的なものの諸段階と人間。哲学的人間学入門』（“Die Stufen des Organischen und der Mensch: Einleitung in die philosophische Anthropologie”）のなかで展開した哲学的人間学の理論は、マックス・シェーラー Max Scheler(1874~1928)によって今世紀前半に創唱されたいわゆる「哲学的人間学」の思想潮流のなかに、プレスナーよりもおよそ一世代ほど若いアルノルト・ゲーレン Arnold Gehlen(1904~1976)らとともに位置しながらも、独自の発想と方法論とに裏付けられ、また独自の視角と問題意識から人間学的な諸問題に接近しようとした点で際立っており、この思想潮流のなかで独特の光芒を放っているにもかかわらず、その評価にかんしてはシェーラーとゲーレンとの影に埋もれ、ドイツにおいても我が国においても現在にいたるまで依然として上記の二人とは隔絶した地位に置かれ続けているかに見える。

周知のように、プレスナーが彼の主著『有機的なものの諸段階と人間』を出版したのは、シェーラーの死の年の一九二八年のことであった。プレスナーのこの著作は、たとえ副題にすぎないとはいえ、「哲学的人間学」という言葉が著作のタイトルに掲げられた最初の試みであるという名誉を担っている。シェーラーが「哲学的人間学」の刊行を予告しながら突然の死のために、その死の年にその綱領的パンフレットである『宇宙における人間の地位』を刊行しただけで、哲学的人間学全体の体系的で十全な展開という自らの志を実現することができなかっただけに、プレスナーのこうした栄誉は、シェーラー以後の「哲学的人間学」の展開のなかでいっそう輝きを増しているかに思われる。しかし、プレスナーの哲学的人間学とその体系的展開である『有機的なものの諸段階と人間』とがその後にとどった運命と世間的な評価とは苦難に満ちたものであったことは、例えばこの著作の第二版の刊行がその初版刊行から何と三六年も後の一九六四年のことであったということに象徴的に表現されている。同じくプレスナーの初期の著作で、『有機的なものの諸段階と人間』に先立つこと四年前に出版された『共同体の限界。社会的急進主義の批判』の第二版の刊行も、彼の八〇歳の誕生日を記念して出版社のブー

ヴィエが特別に取り計らってくれたものであった。プレスナーの著作のなかで最初に比較的的成功したのは一九四〇年にオランダで出版された『笑いと泣き』（邦訳名は『笑いと泣きの人間学』）であるが、これはむしろ例外にぞくすると言ってよい。つまり、端的に言って、プレスナーの哲学的人間学と『有機的なものの諸段階と人間』だけでなく、彼の思想と学説全体が過去においても現在においても、これまでその真の価値にふさわしい適切な評価を与えられないままに放置されて来たと言っても過言ではないのである。翻訳大国の我が国において『有機的なものの諸段階と人間』がいまだに邦訳されていないということも、これが事実であることを傍証している<sup>(1)</sup>。

この重要な著作である『諸段階』（以下、『有機的なものの諸段階と人間』をこう略称することにする）にとって不幸であったことのひとつは、その著者がユダヤ系であったということ、そしてそのためもあってこの著者があの両大戦間のきわめて激動的で苛酷な時期に世間の注目を集める好機に恵まれなかったということである。この著作が出版された前年にはハイデガーの『存在と時間』の前半部分が刊行されてただちに世間の耳目を揺るがせて圧倒的な注目を集めたし、そしてこの著作が出版された同じ年に、シェーラーが死の前年にダルムシュタットの知恵の学園で行った講演が大変な評判を呼んだこともあって世間からは今や遅しと待望されていた前述のパンフレット『宇宙における人間の地位』が刊行された。つまり、プレスナーの主著は、当時きわめて世間的に大きな影響力をもったこれらのふたつの書物のあいだに挟まれて、これらの書物が放つ輝かしい光芒の前に、世間一般の価値観からすれば、その光彩を失ってしまったのである。この著作は、一九三一年になってザクセン科学アカデミーからアヴェナリウス賞を受賞することになった<sup>(2)</sup>のだが、この名誉ある受賞はたとえ少数ではあってもこの著作をも高く評価する専門家がすでに当時存在していたことを証明しているが、このことでさえも先に述べた事態を根本的に変化させることはなかった。こうした状況のなかであって、すでに感覚の質にかんする詳細な研究であるとともに自らの哲学的人間学への転機をなす『感覚の統一』を一九二三年に世に問いながら、著名な生理学者エルヴィーン・シュトラウスによって全く黙殺された<sup>(3)</sup>プレスナーは、彼の哲学的人間学の主著との関連でも、シェーラーから自説を剽窃したのではないかとの嫌疑をかけられたし、プレスナーから『有機的なものの諸段階と人間』の草稿を読み上げられてこの書物を一語一語理解して高い評価を与えたばかりか、こうしたシェーラーの嫌疑に対してそれがまったくの誤解にもとづくことをシェーラーに説得してくれたニコライ・ハルトマンでさえも、彼の論説のなかでは一部をプレスナーに依拠しながら彼をまったく黙殺した<sup>(4)</sup>。そして、一九三三年のナチス・ヒトラーによるドイツの権力掌握、そしてこれに引き続くユダヤ系大学教授の教職追放などの非アーリア化政策への急速な展開という政治情勢の陰悪化がプレスナーを取り巻くこうした状況にさらに拍車をかけることになった。プレスナーはまずトルコ政府の招聘に応じてイスタンブールへと脱出し、さらにオランダの友人ボイテンデイクの尽力を頼りにオランダのフローニンゲン大学生理学研究所へ

と移転して、ナチス・ドイツの魔手を逃れた。こうした政治情勢の緊迫化のなかでプレスナーは、彼と同じくシェーラーとドリーシュの弟子であり、しかしハイデガーほどではないにしてもヒトラーの権力掌握の年に彼と同じようにナチ党に入党して大学教員の積極的な活動家として行動したアルノルト・ゲーレンによっても、彼の一九四〇年の著書『人間。その本性および世界における地位』の初版においてまたもや完全に黙殺されたのであった<sup>(5)</sup>。プレスナーによれば、自分に対するゲーレンのこうした態度は計算されたものであったという<sup>(6)</sup>。もちろん、プレスナーの黙殺はアカデミーの世界の内部にはとどまらなかったものであって、プレスナーのこの主著は、そのほかの彼の著作と同様に、ナチス・ドイツが第二次世界大戦で敗北するまで、ドイツの書店の店頭に並ぶことさえもなかったのである。しかも、第二次世界大戦が終結して解放された後、一九五二年になってゲッティンゲン大学に招聘されたプレスナーを待っていたのは、哲学教授のポストではなくて、社会学教授のポストであった。

プレスナーの哲学的人間学にとっての第二の不幸は、彼がその学問的経歴と人間学的探究との両面において、複数の専門分野にまたがる諸問題をそれぞれの分野の視点から学問的境界を縦断して探究することをいとわなかった点にある。つまり、彼はこの時代にすでにインターディシプリナーリーな研究スタイルを率先して実践したのだが、彼のこうした学問的な強みは世間的な評価からすればかえってマイナスに作用したと言わなければならない。周知のように、ハイデルベルク大学の学生時代にデュッチュリとヘルプストのもとで動物学を専攻していたプレスナーは、この大学の有名教授でありいわゆる新生氣論の提唱者として知られる動物学者・哲学者ハンス・ドリーシュの『課題としての論理学』に魅了されて、動物実験に従事しながらも弱冠二一歳で一九一三年に『学問の理念。その形式についての構想』というタイトルの哲学の処女作を出版して、ドリーシュに献げたほど、思想的に早熟であった。プレスナーはヴィンデルバントの薦めに従って、それ以降学問の基礎づけというテーマを深化しつつ、生物学者から哲学者への転向をとげるのであるが、『諸段階』はまさに類例の少ないこうした彼の学問的遍歴の集大成であって、生物学的諸素材を哲学的に論究するとともに哲学的方法を生物学的諸素材に適用するというかたちで、哲学と生物学の両方の領域にまたがり、それぞれの領域の高度な専門的諸知識を駆使して生命と人間の諸形式を論じており、この点にこそ彼の哲学的人間学の類例を見ない独自の特徴がある。複合的性格をもつ学問的对象をその性質に応じて複合的に取り扱おうとするこうした「越境者の性格」<sup>(7)</sup>こそは、現代においてこそ社会的変動に対応し、ますます複雑化する諸問題の探究に不可欠の方法的態度であるが、きわめて皮肉なことに当時のドイツにおいては、生物学と哲学の両方の専門的研究者からプレスナーの哲学的人間学の学問的な評価そのものを遠ざける結果となった。つまり、生物学者には哲学の専門的議論は理解できず、哲学者には生物学や自然科学の専門的議論は理解できなかったのである。固定的な学派の形成やその基盤となるドグマの遵奉を嫌った自由人であるプレスナーのこうした越境者のまたは学際的性格は、感覚生理学や社会学などの領域にたいしても遺憾なく発揮された

が、こうした多方面にわたって分析と総合の両方を駆使しうる能力の持ち主は、当時のドイツにおいてすら敬遠され続けたのである。

第三の不幸は、プレスナーの著作の形式的側面とその難解さにあった。この時期のプレスナーの諸著作は、『諸段階』だけに限られず一般に、かつてフッサールがプレスナーの初期の著作にかんして手紙で「あなたは読者のことを忘れてしまいました」と忠告したように<sup>(8)</sup>、そしてプレスナー自身が認めるように、その道の専門家以外の一般の読者を想定して書かれてはいない。彼が展開している高度な専門的議論を理解するには、生物学の分野でいえば例えばドリーシュやフォン・ユクスキュルなどの、感覚生理学または認知心理学の分野でいえば例えばヘルムホルツやヴォルフガング・ケーラーなどの高度に専門的な予備知識を必要とする。これに加えて、構成と文体の難解さと簡素さ、しばしば説明が不足していることに由来すると思われるわかりにくさも無視しえない。プレスナーが主張する人間の根本性格としての「脱中心性」や「無場所性」には、生命の階層性を超えた人格と精神の世界というシェーラーのカトリック的思想のような信仰心に訴えかけるポピュラリティも、人間の生物学的欠陥からその「代償」としての自己活動性・行為・言語・社会的諸制度へと説き及ぶゲーレンの人間観のような平明な通俗性も備わっていない。さらに、例えば経験主義とア・プリオリ主義のどちらにも陥ることなく、経験を可能にするア・プリオリな諸条件を探究することによって経験を基礎づけようという彼の方法論の難解さが、彼の著作を理解しようとする人々の前に障害となって立ちはだかっている。プレスナーが研究対象とするのは、決して経験的で具体的な有機的な生命そのものではなくて、例えばその背後にあってこれを可能にしている、もろもろの生命とそれらの環境世界とがおりなす諸関係のア・プリオリな構造的諸形式とその段階づけであるが、生物学的諸素材を扱いながらも経験的・具体的な事例による立証という手続きを直接にとらずに、それらのうちにひそむ生命の論理的諸カテゴリーと諸形式に注目するという「自然の哲学」または「生物学の論理学」の方法論的態度は『諸段階』から読者を遠ざける結果となっている。そしてまた、生物学という経験科学から出発しながら、自然的な客体と人間の知覚との関係を、すなわち外部と内部との関係を、フッサールの「自己遮断」という方法的手続きによっていったんは内面性または自己の先行配置性または先行所与性へと還元し、そうすることによって内在哲学または知覚主義に接近してゆくプレスナーの方法論的アプローチは、普通の生物学の方法からは遮断されているかに見える。したがって、プレスナーの哲学的人間学の方法論を理解するには、カントの批判哲学、デイルタイの解釈学、そしてフッサールの現象学にかんするかなりの専門的理解を必要とするのであって、これだけでも駆け出しの哲学研究者の仕事の水準をはるかに超えるものであろう。

以上に粗描した、プレスナーを取り巻くこうしたさまざまな時代背景と諸事情とが互いに交錯しあって、ドイツにおいてのみならず我が国においても、プレスナーの知名度がシェーラーとゲーレンに比べて著しく低いのか、またはプレスナーの人間学にかんするまともな論評と研究

とが二者に比べて著しく少ないという現況を招来した、と推察される。したがって、ハンス・ウルリヒ・レッシングがいみじくも言うように<sup>(9)</sup>、プレスナーは、彼の人間学の基本テーゼである「脱中心性」と「無場所性」の哲学者にふさわしく、現在の世界の哲学界においてもなお「脱中心的な地位」または「無場所的地位」に甘んじ続けているかに見えるのである。しかし、こうした現状はプレスナーの思想と彼の哲学的人間学にたいする過小評価以外の何ものでもないであろう。『諸段階』第二版の序文でプレスナーが「著者は、シェーラーが忌み嫌い、彼の流儀にそむくこと、つまり有機的世界の段階づけをひとつの観点から把握するという試みを企てた。著者がそうしたのは、感情、衝迫、衝動、精神というような、まさにあの歴史的に重荷を背負わされた諸規定を避けながら、生命ある肉体の特殊な現出様式の特徴づけを可能にするような導きの糸を見つけ出し、これを吟味するという意図からであった、ということに注意されたい。そのような特徴づけは、自然科学の概念装置で行われてもならないし、またシェーラーが古い汎心理主義的な仕方で…提示したような、心理学の概念装置で行われてもならないのである」<sup>(10)</sup>と述べたように、プレスナーの哲学的人間学はやはり、シェーラーのそれとは相対的に独立に、独自の課題意識と視角と方法論に裏付けられて、独自の粘り強い哲学的思索の積み重ねから生み出されており、シェーラーの哲学的人間学とはまた異なった独自の価値をもつことを確認しておかなくてはならないであろう。

以上のような接近の視点から、私は以下の論考において、プレスナーの哲学的人間学の中心的な論点のひとつである「位置性」の概念の解明に重点を置きつつ、またシェーラーやゲーレンの人間学思想と比較しながらその特質を解明するとともに、プレスナーの哲学的人間学に流れ込んでいる思想的水脈、その方法論、課題意識、人間の本質規定の内容とその妥当性などの諸問題にかんして私なりの理解と解釈を提示することによって、プレスナーの哲学的人間学の再評価を試みたいと思う。その意味では本論考は、プレスナーの『諸段階』に先立つ初期の諸著作における思想の特質とねらい、これに影響を与えた当時の自然科学・精神科学の諸成果との内的関係、そして『諸段階』にいたるまでの彼の思想の内的・必然的發展過程の内実、『諸段階』執筆後の彼の人間学の一定の変化など、プレスナーの人間学思想をその総体において解明するいっそう大きな研究課題に先立つ、予備的な試みのひとつにすぎない。

## 第一章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提（1）

### （1）『有機的なものの諸段階と人間』の構想へといたるいくつかの諸契機

プレスナーは『諸段階』初版への序文の冒頭で、この著作を構想したきっかけを自ら次のように述べている。「私は、ハイデルベルクでビュッチュリとヘルプスト、ヴィンデルバントとトレルチ、ドリーシュとラスクの弟子であった動物学者の時期に、この書物を構想する決定的な刺激を受けたのであるが、それは自然科学と哲学とのあいだに深刻な緊張があったからである。この刺激は、一者を他者に犠牲として捧げようとはしなかった者をせきたてて、哲学的な

自然理解の新しい可能性を考えるようにと仕向けた。それは、当時の哲学の鋭い批判に太刀打ちできるとともに、とりわけドリーシュとユクスキュルの新しい生物学の刺激に対してもこれを受け入れる用意があるというような新しい可能性であった。<sup>(11)</sup> プレスナーがここで言う、自然科学と哲学とのあいだにあった「深刻な緊張」とは、本書での彼の叙述の展開に照らして見れば、具体的な事例としては、新生氣論の提唱者として名高い彼の師ハンス・ドリーシュと、ゲシュタルト心理学の創始者および確立者のひとりとして知られるヴォルフガング・ケーラーとのあいだで、主として生氣論と機械論とをめぐって戦わされた論争点のことである。有機的生命の全体性が諸部分のたんなる総和以上のものであるというドリーシュの主張は、ゲシュタルトが諸部分の総和を超えた全体であるというケーラーの主張と重なり合う側面をもっていたが、しかし、生命の全体性がたんなるゲシュタルトとして把握されるのかどうか、そして生きたものの自律がたんなる機械論的分析と物理・化学的分析に還元されるのかどうかという点では、両者の立場は深刻な対立を孕んでいた。プレスナーは、後に見るように、身近なところで起こったこの論争の対決点をたどるうちに、ケーラーの鋭い問題提起を受け止め、これに刺激されつつ、そして生命あるものの本質的諸特徴がいずれはケーラーの言うように無機物質の合法則性へと還元されることを可能性として予感しながらも、他方ではドリーシュが外部から生命に作用する自然要因としてのエンテレヒーを想定したことの不合理さを回避してこれを揚棄するとともに、生命の本質的特徴を確定して生物と無生物とを区別し、また植物・動物・人間の構造形式と階層とを区別しうる新たな説明原理を模索していたのであった。

ところで、先の引用文中の「ユクスキュルの新しい生物学の刺激」とは、もちろん、生物学者のみならず当時の西欧知識人の人間観に多大な影響を及ぼしたヤーコプ・フォン・ユクスキュルの環境世界説によって提起された学問的刺激のことである。ユクスキュルによれば、すべての動物はそれぞれにおのれを取り巻く固有の環境世界をもち、そのなかで動物主体は客体とのあいだで不断の相互交渉を行いつつ生命を維持するが、そのなかで動物は知覚標識の担い手である受容器に与えられた特定の刺激にたいして、作用標識の担い手としての実行器による特定の行動によって反応するという、機能環の図式をもっている。動物主体は単純な段階から複雑な段階へといたる程度に応じて、知覚世界と作用世界とが連結しあうこうした機能環の図式を通じて、環境世界に適応している。ユクスキュルは、後に詳細に検討するように、動物主体に対する客体としての環境世界を「反対構成 *Gegengefüge*」とも呼び、こうした主体と客体との不可分の関係を自然の「生命計画」の研究と名付けて、こうした研究の深化を呼びかけたのであった。ユクスキュルの動物主体を生命一般にまで拡大し、生命あるものと環境世界との相互交渉を無生物のそれと対照して際立たせ、さまざまな階層からなる生命世界とこれを取り巻く自然環境とのそれぞれの相互関係を、それぞれの生命主体が環境世界にたいしてとる「位置性 *Positionalität*」から構造的に解明するという発想こそ、プレスナーが『諸段階』のなかで展開している独創的な思想であるが、こうした発想は確かにユクスキュルの生物学からの直接のイ

ンパクトなしには決して成立しえなかったであろう。

さて、プレスナーが言う「哲学的な自然理解の新しい可能性」とは、彼自身「自然の哲学」、  
「生物学の哲学」、「生物学の論理学」などと言い換えている自らの理論の構想へとつながって  
ゆくものとして確かに重要ではあるが、しかし、『諸段階』の構想にいたるプレスナーの歩み  
は、たんにこうした生物学的次元における諸問題だけから単一の方向で生じたのではなくて、  
むしろ直接には『諸段階』に先立ついくつかの諸著作でプレスナーが追求してきた一貫した研  
究の延長線上にある。彼は『諸段階』の初版序文の先にあげた引用文の直後で「本書が取り扱  
っている哲学的な生物学および人間学の諸問題は、私が感覚哲学的な研究を一貫して継続して  
きたことから生じたものである」<sup>(12)</sup>と述べているように、人間の感覚または感性の基礎づけ  
をめぐる研究がプレスナーにとっては主たる柱であって、先に述べた生物学上の学問的刺激が  
この研究に付け加わってきて、これらが『諸段階』に統合されたと考えるべきであろう。プレ  
スナーがおのれの学問的遍歴を回顧して語っているように、彼はドリーシュの著書『課題とし  
ての論理学』を読んでその生物学と哲学との結びつけ方に魅了され、論理学と思考心理学との  
結合に自分の学問的理念のヒントを得たことによって哲学者への転回の第一歩を踏み出したの  
であるが、それ以来一貫して認識論、学問的方法論、感覚の基礎的研究などの分野に関心をも  
ち続けてきた。そして、こうした彼の研究の方向性はやがて感覚の哲学へと総合されて、一九  
二三年に出版した『感覚の統一。精神の感覚学綱要』のなかに結実することになる。プレスナ  
ーはこの著書のなかで、人間と世界とを媒介する諸感覚 *die Sinne* の質が客観性をもつかどう  
かという問題、言い換えれば、感覚諸性質が現象の変化のうちでもつ持続的な構造諸性質の問  
題を取り扱ったのであるが、彼はそうするうちに人間の身体と環境世界との関係を、いっそう  
根本的・統一的に、しかもたんに感覚次元の問題レベルを超えて、理解する必要があることに  
気がつくことになったであろう。人間の身体と環境世界とのあいだに相互関係的な諸法則が存  
在するという彼のこうした自覚から、こうした研究は感覚の基礎的研究のレベルを超えて、人  
間以外の生物と環境世界との関係にも拡大され、生命あるものの知覚の一般理論へと展開され  
る必要が生ずるし、こうした研究のなかで同時に植物・動物の関係形式と人間のそれとの本質  
的相違が展開されなければならないであろう。「この課題は人間の人格についての学説を要求  
する。感覚批判の思想はすなわち人間学に流れ込むのである」<sup>(13)</sup>とプレスナー自身が述べて  
いるとおりである。

さらにプレスナーは、上述の同じ序文の引き続く箇所では、ごく簡潔に「認識の基礎理論の問  
題からのこうした発展のほかにも、社会哲学的な研究が私をじかに人間学的な問題へと向かわ  
せた」<sup>(14)</sup>と述べて、『有機的なものの諸段階と人間』に結実するもうひとつの問題意識の方向  
の存在を明らかにしている。この「社会哲学的な研究」とは、彼が一九二四年に『共同体の限  
界。社会的急進主義の批判』というタイトルで公刊した著作に代表される社会哲学的研究のこ  
とである。プレスナーはこの著書のなかで、かつてしばしば人間の私的領域の拡張・深化と考

えられてきた理想的な共同体にかんする思想が、ドイツの第一次世界大戦における敗北と挫折をへて、民族運動とファシズムまたは共産主義というかたちで展開されて、政治化されている状況を批判した。こうしたプレスナーの社会哲学または社会倫理的な問題意識は、例えば権力にたいする志向を人間のなかに巣くう動物的な諸要素として固定化するような人間観または人間把握とも対決し、これに対抗しうる人間観を対置する必要を自覚させた。プレスナーからすれば、人間学的研究を独自に深化する必要はこうした領域でも生じていたし、人間と人間をとりまく世界との関係の構造形式にかんする彼の理論、すなわち彼の哲学的人間学における人間の本質規定は、社会哲学や人間の歴史と文化といった問題領域においても直接に有効な射程をもちうるものでなければならなかったのである。

さらにこの『共同体の限界』の序文には、次のような叙述があることを見落としてはならないであろう。それは、後になって『諸段階』として結実する書物の刊行が次のような位置づけにおいて最初に予告されているからであり、そしてわれわれが以上に総括したプレスナーの学問的な問題意識と『諸段階』の構想とが著者自身の言葉によって裏付けられるからである。「われわれは一年以内にわれわれの認識理論の第二巻を刊行することを望んでいる。その第一巻は感覚の理論を取り扱った精神の感覚学であった。だから、知覚の理論が『植物、動物、人間—生きた形式の宇宙論の初歩』というタイトルで展開されるはずである。人間学の諸原理を叙述することは、知覚の理論に関連している。」<sup>(15)</sup>つまり、プレスナーの『諸段階』で展開される哲学的人間学は、彼の認識理論の第二部として、しかも知覚の理論として構想されたのである。さらにわれわれがここで確認しておきたいのは、この序文が書かれたのは一九二四年一月のことであって、われわれが先に言及したシェーラーのあの有名なパンフレットの刊行に先立つ四年以上前の出来事だという事実である。こうした事実からも、シェーラーのこの綱領的文書の影に隠れてしまったと言われるプレスナーの哲学的人間学は、その構想の骨格を熟成させるまでの比較的長いプロセスにおいて、シェーラーとは相対的に独自の道を歩んで仕上げられたことが理解されるのである。

プレスナー独自の哲学的人間学体系の構想は、彼自身の言葉をてがかりにして以上に粗描したいくつもの契機と方向性——もちろん、以上に素描したものだけにとどまるわけではないが——とが交差しあう合流点において成立している。プレスナーの人間学思想の解釈にあたっては、われわれはたえずこうした諸契機と方向性との交差を再確認しながら、進んでゆかねばならないであろう。

## (2) 「生の哲学」をめぐる問題状況

プレスナーの『諸段階』における「自然の哲学」、言い換えれば、生命あるものの諸形式にかんする理論は、いきなり自然科学的または生物学的な考察から開始されるわけではない。プレスナー自身が「私の発展にとって『感覚の統一』は哲学的人間学へといたる突破口となった



が、そのまったく独自の道はユクスキュルからではなく、デイルタイから出発したものだった<sup>(16)</sup>と回顧しているように、プレスナーの有機的なものにかんする考察と叙述は、デイルタイ流の生の哲学および解釈学、もっと正確に言えば、デイルタイの高弟であるゲオルク・ミツシュが解釈して継承しようとしたデイルタイの理論を経由して、これに媒介されている。プレスナーにおいては、生命と生とが、つまり、客観的・科学的な生命概念と、非合理主義的で生の哲学的な生概念とが重なり合っているのものであって、門外漢にはその性格を単純には理解しがたいものになっている。プレスナーの哲学的人間学のまさしく開始点におけるこうした初発の矛盾点は、やがてその人間学の体系的展開のなかで萌芽的形態からさらに現実的形態へと次第に顕在化をとげることになるであろう。

プレスナーは、デイルタイのこうした生概念を受け入れて、『諸段階』の本文の冒頭でこう述べることで、彼の哲学的人間学の叙述を開始している。「いつの時代にもその時代を救済する言葉がある。一八世紀の学術用語で全盛をきわめていたのは理性という概念であり、一九世紀のそれは発展という概念であり、現代のそれは生 *das Leben* という概念である。いつの時代にもこれらの言葉で異なったものを言い表している。理性は時間を超えたものおよび普遍的な拘束力をもつものを強調し、発展は休みなく生成し向上するものを、生はデモーニッシュに行動するもの、意識することなく創造的なものを強調している。ところがそれにもかかわらず、どの時代もすべて同一のものをとらえようとしているのであって、これらの言葉のもともとの意味内容は、…事物のあの究極の深みを明らかにするための手段となっているにすぎない。」<sup>(17)</sup> プレスナーにとって、生とは「人間精神の創造的な力」<sup>(18)</sup>であり、「時代は、この生という言葉のなかに、その固有の力、そのダイナミズム、その賭博者性、知られざる未来のデモーニッシュな力にたいするその喜びを聞き取る。そして、その固有の弱さ、その根源性の欠如、自己犠牲、生きる能力を聞き取る」<sup>(19)</sup>。周知のように、デイルタイによれば、生とそれの体験とが根本的事実であり、思考や理性は生と体験を基盤として成立するから、生を理解するには生それ自身から出発しなければならない。こうして、ニーチェに代表される、生の非合理性と自己を超越する活動を強調する思想潮流をおのれの哲学のうちに継承したデイルタイの生概念をそのまま受け入れたプレスナーは、生の哲学として特徴づけられる思想の内部でおのれ以外の生の哲学との対決を迫られることになる。さしあたっては、彼によって経験と対立する直観的な生の哲学として特徴づけられる、ベルグソンとシュペングラーの両者との対決がそれである。

ベルグソンは、スペンサーの進化論的な思想、すなわち人間の認識がもつ諸カテゴリーは適応の成果として進化の所産であって、その必然性は意識の担い手と世界との被適応性によって保証された一致によって説明されるという理解を、それが因果性・実体性・相互作用などとして自然のうちに存在する同一のカテゴリー諸形式を意識のうちに繰り返したにすぎない循環論法であるとして、これを批判した<sup>(20)</sup>。プレスナーは、こうしたベルグソンのスペンサー批判を

肯定的に評価し、ベルグソンが自然と意識の両者を分離・再結合したりするのではなく、生の概念にほかならない「自然と精神とを包み込む力、存在と意識とに創造的に浸透してゆく力」<sup>(21)</sup>を提示したことを評価しながらも、生の流れに身を置いて泳ぎながら、実利的な思考がもつカテゴリー機構の背後に隠されている生の真相を生が直観的にとらえるという方法を批判する。生物学的な問題提起の枠内で生命の問題を思考しようとしたベルグソンは、直観主義的方法という非合理的な認識源泉に立脚している点で、自然科学的経験に反対しており、したがって彼は生の概念の基礎づけを真に行うことができず、生の創造的な本質についても明確な解答を出すことができない、というのである。

シュペングラーについても同様である。シュペングラーは第一次世界大戦と第二次世界大戦とのあいだのいわゆる戦間期の直前に、世界史形態学という方法論を用いて世界史における文明の興隆と衰退を研究し、その結論としてペシミスティックに西洋の没落を断定したが、彼もまたゲーテとニーチェとに傾倒し、自らの直接の先駆者としている。シュペングラーによれば、創造的・母性的な生の力の爆発的な発現が文化のなかに魂の諸形式をつくりだし、これらの諸形式に応じて洋の東西において異なった世界像としての自己了解と自然理解が成立するが、西洋においてはこれは「ファウスト的心性」<sup>(22)</sup>として発現する。プレスナーによれば、シュペングラーは生の哲学という生物学的問いを文化という媒体のなかだけで考えようとしており、西洋人の「ファウスト的心性」として直観的に構成されたものが結局は経験的分析を拒否し、そのために精神科学にたいして反対するという結果をもたらした点が問題とされなければならない。

したがって、結論から言えば、「直観主義的な生の哲学は、その構想全体からすれば、精神的・歴史的な現実性の主体であり、責任意識をもった人倫的人格である人間を、人間の肉体的な博物学および系統発生によって確定されているのとまったく同じ観点で考察することができない。この生の哲学は、精神としての人間に本質的であるようなアスペクトと、人間の自然的な現存在を提示するアスペクトとを統合して、経験主義的およびア・プリオリ主義的な誤りを避けながらも経験的観点の統一と等質性が保たれているというようにすることができない」<sup>(23)</sup>がゆえに、経験に対立する直観的な生の哲学は、そのベルグソンの形態もシュペングラーの形態も同様に退けられるのである。プレスナーの人間学の基本的な立場は、唯物論的・自然主義的・経験主義的な哲学と、唯心論的・観念論的・ア・プリオリ主義的な哲学のいずれもが人間の全体性をとらえることに失敗した以上、これらのいずれにも与することなく、人間における自然と精神との結び付きと自然における人間の位置とを新たなパースペクティブから規定し直すこと、言い換えれば、世界の意識のアスペクトと肉体のアスペクトという、人間がもつ二重のアスペクトに真正面から取り組むことにほかならない。それでは、プレスナーが言うところの「直観主義でも経験に敵対的でもない流儀の生の哲学」<sup>(24)</sup>とは、いかなる内容をもつものであろうか。

### （3） プレスナーの哲学的人間学の課題意識

人間の個体的・歴史的な生の経験を、経験を排除せずに、しかも経験主義に陥ることなく、また直観主義にもア・プリオリ主義にも陥ることなしに、とらえることははたして可能であるか。プレスナーの答えはイエスである。生の経験は、個体的・歴史的に表現されたものを生が自己了解することによって、把握される。こうした生の経験を基礎づけるのは精神科学でなければならない。したがって、問題は「表現にかんする普遍的な学」をどのように精神科学として構築しうるかにかかっている。しかも、個体的・歴史的に表現されたものを了解する方法は解釈学によらなければならない。こうした観点から、プレスナーはあくまでも、感覚の様相の感覚学という自分のアカデミックな研究の延長線上に自らの哲学的人間学の必要性と課題とを位置づけている。ここには、「人間の自己意識と自己観察の新しい形式を——人間にかんするさまざまな獲得された個別的知識の強大な宝庫にもとづいて——展開する」という「誠実の新しい勇氣」<sup>(25)</sup>を自他に要求したシェーラーの気負いも、「厳密に理解すれば、私はひとつの基本的人間学だけを示しているのだが、この基本的な事柄はまさしく人間の場合にはまったく特別な範囲にまで達しており、その効果においてはそもそも際限がないであろう」<sup>(26)</sup>と述べたゲーレンの過信もみじんも見られない。プレスナーが自らの哲学的人間学によせる課題意識は着実で、控えめで、地味でさえある。しかし、すでに述べたように、社会的ラディカリズムの批判という副題を付して出版した『共同体の限界』に見られるように、社会批判を通じて、人間の歴史的・文化的な実践、さらに社会哲学または社会倫理の領域においても十分に通用する人間の理論を構築する課題の必要性を彼が痛感していたことは事実であるから、ただ彼はおおげさな言辞を謹んでいるにすぎないのである。

さて、プレスナーによれば、「表現にかんする普遍的な学というこうしたアспектから見れば、哲学的人間学と人間にかんする学説の諸問題は、そして人間が営む生の現実存在の構造法則を探り出して追求することは、どうしても必要であることがまたしても明らかになる」<sup>(27)</sup>。それでは、哲学的人間学と哲学的生物学との関係はどうか。「人間を担っているのは生きた自然であり、人間は、精神化にもかかわらずこの生きた自然のとりこになったままであり、どんな昇華のためにも力と素材をこの生きた自然から手に入れる。そういうわけで、哲学的人間学にたいする要求はおのずから、哲学的生物学にたいする要求を迫っており、生命の本質諸法則または諸カテゴリーの学説にたいする要求を迫っているのである。」<sup>(28)</sup>したがって、他の箇所でも「人間の哲学が存在しないとすれば、精神諸科学における人間の生経験の理論も存在しない。自然の哲学が存在しないとすれば、人間の哲学も存在しない」<sup>(29)</sup>とされているように、精神科学によって初めて十分に解明される人間の生経験の理論、哲学的人間学、そして生命の諸階層の理論とは相即不離の関係にある。なぜならば、「精神科学的な経験の基礎づけという思想は、『生』の感性的・物質的な、肉体的な領域のなかにまで達するような諸問題を究

明せずにはおかないし、それゆえに、きわめて広く、きわめて根源的な意味において理解された自然の哲学を必要とせずにはおかない」<sup>(30)</sup>からである。

ここで早くも人間にかんするプレスナーの基本的見解がそのおおよその骨格を現している。それは、人間はいうまでもなくおのれの肉体という自然と精神とから構成されているだけではなく、自然と精神とにまたがって存在しているのであるが、人間のこうした現実存在の形式に由来する構造法則が自然と心または精神という二重のアスペクトを構成しており、したがってこうした構造法則そのものが自然と精神の二重のアスペクトの統一と対立、逸脱と交差、作用と反作用という内的関連において人間とその経験をとらえるということの必然性を証示している、という見方である。それは、後述するように、シェーラーやゲーレンのようにプラグマティックに行為または行動の概念をもちだすことによって心身の無差別へと逃げ込んで心身問題の解決を回避するという思考態度<sup>(31)</sup>ではなくて、かえってむしろ、現実存在する心身の統一と対立・相克とを冷徹にまた客観的に受けとめて、これを人間のもろもろの表現行為と関係づけて考察し記述するという現実的な思考態度を要求することにほかならない。人間にかんするこうした基本的な見方はプレスナーの哲学的人間学の体系的展開全体を通じて一貫して堅持される。

こうした見解からすれば、プレスナーの哲学的人間学にはさらに二重の探究方向が要請されることになる。ひとつの方向は、人間は一方ではおのれの肉体と周囲の環境世界というふたつの自然とに必然的に関係しなければならないという側面であって、この側面は人間の生の世界の地平をなしており、したがってそこでは人間と周囲の自然としての環境世界との水平的関係が探究されなければならない。他方では、人間の心と精神の世界は、肉体的自然というひとつの基礎的な層のうえに構成されており、この基礎的層に依存するとともに、この層を用いて労働などを行い、そうすることによってこの層へと反作用するという構造をもっている。生命そのものおよびもろもろの有機体の諸系列と必然的に関係せざるをえないこうした側面は重層的な関係であって、それゆえにそこでは垂直的な探究がなされなくてはならない。プレスナー自身の言葉で言えば、人間にかんする「この問いは、二重の方向で究明される。ひとつは、水平的に、すなわち人間によって探し求められた人間と世界との関係を通じて、彼の所行と受苦のなかで確定される方向で究明される。もうひとつは、垂直的に、すなわちもろもろの有機体の系列のなかにある有機体としての人間が世界において占める自然成長的な地位から生ずる方向で究明される。これらふたつの方向で、文化の主体・客体としての人間と、自然の主体・客体としての人間とを現実的に包括するのであって、人間を人為的に抽象して分割したりしない、という希望をいただくことができる。それというのも、人間が彼の現実存在のなかで自分と世界にたいしてとっている、生経験のただひとつの基礎的アスペクトが維持されているからである。それは、自然に束縛されていると同時に自由であり、おのずから成長したと同時に作られているという基礎的アスペクトである。」<sup>(32)</sup> プレスナーが『感覚の統一』で目指したのは主として

水平的な探究であったが、垂直的な探究は今度は主として『諸段階』において展開されなくてはならない。プレスナーはこのようにして、『感覚の統一』と『諸段階』との関連、前者から後者への移行の必然性、そして自らの人間の生経験の理論と哲学的人間学と哲学的生物学との相互関係を規定している。

#### (4) 哲学的人間学の方法;カントの批判哲学, 解釈学, 現象学

プレスナーの哲学的人間学の導きの糸となる方法は、これまでの叙述から了解されるように、経験科学・自然科学・個別科学の方法ではありえない。このことは、プレスナーのみならず、哲学的人間学の創始者であるシェーラー、さらにプレスナーよりほぼ一世代若いゲーレンをも含めて、およそ哲学のひとつの潮流としての「哲学的人間学」にぞくする人々が一様にいっていた方法論的確信であった<sup>(33)</sup>。プレスナーは「一言でいえば、人間が生き、自分を理解しているとおり、感性的・人倫的な存在として、ひとつの経験的立場で、すなわち『自然』と『精神』とにまたがった、人間の現実的存在にふさわしい経験的立場で人間を把握しようとするならば、そのための手段もまた作りだされなければならない。しかし、この手段を、個別諸科学がもっている伝統的な概念の宝庫から借用してくることはできない」<sup>(34)</sup>と述べ、また他の箇所でも「人間の生の現実性を、人間によってこの現実性が映し出されている姿で理解させようと努める精神諸科学の一理論は、哲学人間学としてのみ可能である。というのは、人間の現実存在における人間の本質諸形式にかんする学説だけが、普遍的な解釈学のための土台と手段とを提供するからである。哲学的な人間学と、(心身中立的な)人格の本質諸法則にかんする学説というその中心部分とは、またしても生きた現実存在の本質諸形式にかんする学にもとづいている場合にのみ実現可能であり、したがって、人間が(心身中立的な)人格として存在するようになる領域全体、周辺圏全体にあてはまる固有の概念装置を作り出さなければならない。哲学的人間学とその中心部分とは、経験科学からこうした概念装置を譲り受けることができない」<sup>(35)</sup>と述べている。なぜならば、「自然科学であろうと精神科学であろうと、どの個別科学も事物にかんするある特殊な還元を企てている」<sup>(36)</sup>からであり、「本質的でありつづけるのは、哲学、生物学、心理学、医学、社会学に見られるような、人間を断片化して考察するという方法を克服してゆこうという一貫した傾向である」<sup>(37)</sup>からである。そしてまた、生の経験を基礎づけるという哲学的人間学の課題は、同じ領域における経験によって行われるということとはありえないからである。生の経験が経験によって基礎づけられはしないとすれば、いったい何がそうした基礎づけをなしうるのか。プレスナーによれば、それはア・プリオリな諸条件にほかならない。

ここでプレスナーは、先に経験と対立する直観主義的な生の哲学を批判し、自然主義とア・プリオリ主義との双方を批判したにもかかわらず、哲学的人間学における経験科学の有効性を拒否し、経験を経験によって基礎づけることを拒否しているばかりか、自らの方法論的立場を

ア・プリオリな探究と名付けているのだが、われわれにはこのことがパラドキシカルに思われるにちがいない。プレスナーの方法論的な視座設定の真意を解明するために、われわれはここで回り道をして、プレスナーの思想に流れ込んでいる方法論的議論の水脈を探って見ることにしよう。

プレスナーの哲学的人間学の方法論に流れ込んでいる主要な思想的水脈は、カントの批判哲学、フッサールの現象学、そしてデイルタイの解釈学の三つであろう。

ゲッティンゲン大学でフッサールの指導を受けることになったプレスナーは、フィヒテの知識学に取り組むうちに、カントを知らなすぎることを自覚したことがきっかけで次第にカント研究に深入りし、超越論的観念論にかんしてカントとフッサールとの境界をはっきりさせるという作業に研究の重点を移した<sup>(38)</sup>。フッサールがフライブルク大学へ招聘されたあと、彼の後を追わずにエルランゲン大学のパウル・ヘンゼルのもとでカントの批判哲学を取り上げて「理性批判はどのようにして、またいかなる仕方で一般に可能か」という問いをテーマとして学位を取得したプレスナーは、この学位論文を『始源における超越論的真理の危機』として出版したあと、すでにケルン大学に職を得ていたシェーラーのすすめで教授資格申請論文『哲学的判断力批判の研究』で資格を得ることができた。こうした時期から『感覚の統一』にいたるまでのプレスナーの哲学上の営為は、カントの三批判の構成計画の全体像を自分なりに把握し、例えば感覚論的諸問題を、カントの図式論に依拠しながらも、これをカントには存在しなかった例えば視覚の構造法則の「物質ア・プリオリ」<sup>(39)</sup>の問題へと拡張したりなど、一貫してカント批判哲学の理念を再把握し、そのうえで認識論的・方法論的な拡張を行うことを目指して来た、とあってよい。このことは、『諸段階』の「精神科学的な知識の可能性にかんする問い」にかんして「新しく開かれた経験世界が命じているのは、カントの意味で、カントを超えて進んでゆくことであり、カントの認識論の拡張を企てるということである」<sup>(40)</sup>というプレスナー自身の言葉に見られる通りである。ここでア・プリオリの問題について言えば、プレスナーは『諸段階』第二版序文のなかで、この著作の探究がめざす課題について「有機的なものがもつ本質諸徴表の展開」と「帰納的枚挙に代わる厳密な基礎づけの試み」の二点をあげ、前者にかんしてさらに「有機体の本質諸徴表についてのア・プリオリな理論」と特徴づけている<sup>(41)</sup>。しかし、ここで彼が言う「ア・プリオリ」とは、「特定の事態がわれわれの経験に生じるために満たされていなければならないような、可能性の諸条件を追求する」<sup>(42)</sup>という意味であり、言い換えれば、現事実を可能にする内的条件を経験によらずに探究するという意味にほかならない。カントにとっては悟性の諸カテゴリーは経験を可能にする構成条件であったが、「ア・プリオリ」をこのような意味において経験を可能にする構成条件として理解するのは、例えば偉大な認知心理学者ヘルムホルツにも見られる<sup>(43)</sup>。したがって、これは、当時のカント主義者ないしカントの影響を受けた人々のあいだでは一般的な用語法であったと言ってよい。したがって、プレスナーによれば、経験主義に陥ることなしに生の経験を基礎づけ、ア・プリオリ主義に陥る

ことなしに生の経験を可能にする内的諸条件を探るという課題は、その内部にいささかも矛盾を含んではいないのである。

プレスナーの哲学的思索の揺籃期を育てた、ヴィンデルバントやリッケルトらの新カント派の哲学がもともとカント的な超越論的論理学を価値哲学や文化諸科学の批判的基礎づけへと拡大しようというプログラムを指向して来たのだが、プレスナーもまた共有していたこの方向は、「それというのも、カントの批判哲学は科学的経験の認識論と対象理論のための出発点をなして、この理論から——この理論のもともとの傾向とはまったく逆に——新しい生の哲学の展開が始まるからである」<sup>(44)</sup>と彼自身が言明しているように、とりわけゲオルク・ミッシュの思想を媒介してディルタイの解釈学と出会うことによって、プレスナーの哲学的人間学のなかで新たな展開をとげることになる。プレスナーは、数少ない彼の回想録である「私の履歴書」のなかで、先にも引用したように、「私の発展にとって『感覚の統一』は哲学的人間学へといたる突破口となったが、そのまったく独自の道はユクスキュルからではなくて、ディルタイから出発したものだ」<sup>(45)</sup>と述べて、自らの哲学的人間学の方法がその重要な柱をディルタイの解釈学に負っていることを再三にわたって確認している。

周知のようにディルタイは、とりわけ『精神科学序説』のなかで精神諸科学を基礎づけるために、その重要な一部分としての心理学に注目したが、自然科学をモデルにした伝統的な心理学ではなく、人間の歴史的経験の個別性と全体性を解明しうる、記述的な、または人間学的な心理学の構想に学問的な熱意を傾注した。このディルタイの構想はやがて、「一切は意識の事実であり、したがって意識の諸条件に従う」<sup>(46)</sup>という現象性の命題を強調し、すべての反省に先立つ覚知 *Innewerden* を通じた人間の生の根源的通路を経て時間の様態の解明へと展開するのだが、このことによって一方ではカントの超越論的論理学との区別と、他方ではフッサールの現象学との接点をもつことになる。こうした精神科学の基礎づけにかかわるディルタイの構想は、周知のように、もっぱら自然科学の認識論と解されるカントの『純粹理性批判』に対して、これを補うという意味をもち、人間自身と人間によってつくられた社会と歴史との現実を認識する認識能力の批判、すなわち「歴史的理性批判」を提起した。ディルタイ自身が生涯にわたって思索を続けながらも完成させることができなかったこの課題は、彼の高弟であり娘婿でもあったゲオルク・ミッシュによって受け継がれる<sup>(47)</sup>。プレスナーは、とりわけこうしたディルタイの課題意識の意義を理解してこれを引き継ごうとしたミッシュの見解に触発されて、「この時代のアカデミシャンたちのうちで、歴史的理性の批判を求める呼びかけによって論理学のたんなる拡大以上のことが宣言されていることに気づいていたのは、ただひとりディルタイであった」<sup>(48)</sup>と述べて、ディルタイに高い評価を与えただけでなく、「自然科学と精神科学との対立がもはや学問論を引き裂くことがないようにする」ために、精神的・歴史的現実性と自然とをまったく同一の観点でとらえ、精神科学の基礎ばかりか「普遍的な哲学的論理学」の中心点にまで入り込んでゆく「解釈学」、すなわち言語領域だけに限定されない、表現・表現

了解・了解可能性にかんする学の必要性を力説したミッシュの主張<sup>(49)</sup>にほとんどまったく同意している。

こうした意図のもとに追求されるプレスナーの哲学的解釈学は、デイルタイとフッサールとが多くの点で互いの共通性を確認しあったように、さらに現象学的方法とも関係してこざるをえない。プレスナーにとっては、上述したデイルタイの解釈学のプログラムは、「思念する働き *Meinen*」の諸対象に経験以前の構造分析的な記述を適用するというフッサールの現象学の構想と結びつけられて初めて実行可能なものであった。「哲学的解釈学は、生の自己了解が、歴史を通じて生が得た経験という媒体のなかで可能であるかどうかという問いにたいして体系的に答えるものであって、表現の構造法則の探究にもとづいてのみ着手されるばかりか、仕上げられもする。…哲学的解釈学が生経験の可能性を把握しようとするれば、当然のことながら、経験と経験概念とにもとづいて作業することはできない。したがって、現象学的な記述がこの場に介入してくるが、この記述は根源的な直観へと導いてゆき、この直観から離れることがない」<sup>(50)</sup>、また「その目的とは、文化科学および世界史における生経験の基礎づけというアスペクトから、哲学を新たに作り直すことである。こうした道にいたる段階行程は次の通りである。つまり、解釈学によって精神諸科学を基礎づけること、解釈学を哲学的人間学として構成すること、生きた現存在の哲学とこの現存在の自然のままの地平とにもとづいて人間学を展開することである。そして、この道をさらに先へと進んでゆくために必要な本質的な手段(唯一の手段ではないが)は現象学的な記述である」<sup>(51)</sup>とプレスナーは言う。プレスナーにとっては、経験科学または個別諸科学の常套手段である計量化・数学的处理は、例えば感覚的質の意味を真に解明しえず、人間に体験・直観などというかたちで与えられた無媒介的な所与の意味を脱落させてしまう点で限界をもたざるをえないが、科学と体験の二元論ともいべきこうした事態は、現象学的方法または現象学的記述によって克服されるように思われた。先に述べた、経験的に確認されうる生命現象を可能にするア・プリオリな諸条件にかんするプレスナーの探究は、まさしく根底において現象学的方法と深く関連している。

しかし、プレスナーにとって現象学はたんなるひとつの手段であって、目的そのものではない。哲学的人間学の体系における現象学的方法の位置づけにかんしては、プレスナーとシェーラーとは大きく異なっている。プレスナーは、『諸段階』の初版序文のなかで、シェーラーを「今日までこの分野でただひとり仕事をしたあの卓越した研究者」<sup>(52)</sup>として高く評価し、敬意を表しつつも、こう指摘することを忘れてはいない。「シェーラーは、彼の哲学には形而上学的な傾向があるにしても、あらゆる基礎づけの諸問題においてはやはり現象学者なのである。彼の本質的な仕事は、最後の出版物にいたるまで、彼がまず第一に現象学的に方向づけられていたことを示している。しかし、われわれは、一九一八年に出版されたわれわれの方法論的著作以来、根拠を確実にする研究態度として現象学を用いることには反対を唱えてきた。…われわれの考えでは、現象学的な著作は哲学のためにある特定の案内を必要とするが、この案



内は経験的知識に由来することも、形而上学に由来することもできない<sup>(53)</sup>、と。確かにプレスナーは、かつての師ドリーシュの招聘がすでに決定していたケルン大学のシェーラーから「ケルンへいらっしゃい。新しいアレクサンドリアへ」と薦められて、ここで教授資格試験を受けたし、例えばシェーラーの家でボイテンダイクと知り合ってもいるから、当然シェーラーがその早すぎる突然の死によって果たすことができなかった哲学的人間学の構想ともある程度は触れ合っていたであろう。しかし、『諸段階』第二版の序文のなかでプレスナーがシェーラーの弟子と呼ばれることを断固として拒否している<sup>(54)</sup>ことは、われわれにとって看過することができない事実である。両者の関係がこうならざるをえなかった理由のひとつは、プレスナーがその主著において有機的なものの諸段階という階層的探究を行おうと試み、その際に衝動・衝動と精神との二元論のようなフロイト的・汎心理主義的な接近を行わなかったという内容上の側面の差異のほかに、上記のような現象学的方法の位置付けをめぐるシェーラーとのあいだに根本的な差異があったことにあるであろう。

それでは、プレスナーからすれば、根拠を確実にする研究態度としていったい何が用いられるべきなのか。『諸段階』の第三章で彼はこう述べている。「有機的なもののそのようなア・プリオリな研究は、現象学と類似しているというよりも、弁証法に類似しているように見える」「直観が示す通りの『有機的なもの』の本質標識を静態的に記述したり、本質標識の理論をどれもそのままに放置しておくか、あるいはこれを他の諸科学に委ねたりすることが、やはり現象学的な探究の要点である…」「現象学的な探究は、その本性からすれば、指標となる本質的諸徴表のところで始まらなければならないが、そのさい現象学的な探究が指標となる本質的諸徴表を超えて、構成的な本質的諸徴表へと足を踏み入れることができるかどうかは、依然として疑わしいままである。構成的な本質的諸徴表が現象学の研究領域にぞくすることは確かである。これに対して、現象学的探究には、構成的な本質的諸徴表のカテゴリー的性格を洞察することは絶対にできないままである。いかにして現象学的な研究が、強制されずに、生物学の論理学という諸問題から、そればかりか生物学の体系化という試みからおのずと生まれるのかを問題にするとすれば、静態的な本質記述の方法が用いられてはならず、生命の諸カテゴリーのひとつの原理または演繹という尺度に従って、本質層をめぐる試みが行われなくてはならない。」<sup>(55)</sup>われわれはここでも、プレスナーの方法論がまたしてもカントの方法に立ち戻っていることを知るのである。そして、彼の哲学的人間学の方法論の問題点もまたひとえにこの点にあると言わなければならないであろう。（次号へと続く）

1999年7月8日

注

- (1) このプレスナーの『有機的なものの諸段階と人間。哲学的人間学入門』の翻訳は、私ともう一人の共訳者によって、法政大学出版局から近刊の予定である。
- (2) Plessner, Selbstdarstellung, Helmuth Plessner Gesammelte Schriften X, Suhrkamp, S. 330以下を参照されたい。なお、このアヴェナリウス賞の受賞は、プレスナーの哲学的人間学の基礎的認識論が一面におい

- て、エルンスト・マッハ、シュッペ、アヴェナリウスらのいわゆる「内在哲学」にきわめて接近していることを物語っている。
- (3) Ibid., S. 319~320.
- (4) プレスナーの研究者、シュテファン・ピエトロヴィッチは次のように述べている。ニコライ・ハルトマンは、アルノルト・ゲーレンの『人間』初版にたいする書評のなかで、例えばプレスナーのGuß(鑄型)という言葉を用いて、明らかにプレスナーに依拠しながらゲーレンを好意的に書評したにもかかわらず、プレスナーの名前を一度もだすことがなかった、と。Stephan Pietrowicz, Helmuth Plessner, Alber, 1992, S.21を参照されたい。なお、ハルトマンのゲーレン書評は、Nicolai Hartmann, Neue Anthropologie in Deutschland. Betrachtungen zu Arnold Gehlens Werk "Der Mensch, seine Natur und seine Stellung in der Welt", in Blätter für Deutsche Philosophie, Bd. 15, Heft1/2, 1941, S. 159~177に掲載されているが、これを読めばピエトロヴィッチの指摘の正しさが立証されよう。
- (5) Arnold Gehlen, "Der Mensch, seine Natur und seine Stellung in der Welt", Gesamtausgabe, Band 3, Teilband 1 und 2, Vittorio Klostermann, 1993を参照のこと。ゲーレンおよび彼の親族とナチとのかかわりについては、私の論文「アルノルト・ゲーレンの哲学的人間学の問題点」(1) (『札幌学院大学人文学会紀要』第41号、1987年) の特に序章注(17)を参照されたい。ゲーレン、ハンス・フライヤー、H.-G. ガダマーらを含むドイツの哲学者たちとナチとの関係については Laugstien, Philosophenverhältnisse, Argument, 1990に詳しい。とくにS. 202を参照のこと。また、Tom Rockmore, On Heidegger's Nazism and Philosophy, University of California Press, 1992, p.34を参照されたい。ゲーレンの哲学的人間学の問題点については、私の上記論文のほか、「アルノルト・ゲーレンの哲学的人間学の問題点」(2) (『札幌学院大学人文学会紀要』第45号、1989年)、同(3) (同上、第49号、1991年)、同(4) (同上、第50号、1991年)、同(5) (同上、第52号、1992年)を参照されたい。
- (6) Plessner, Selbstdarstellung, ibid., S. 330を参照されたい。
- (7) これはハンスーウルリヒ・レッシングが述べた適確な表現である。Hans-Ulrich Lessing, Hermeneutik der Sinne: Eine Untersuchung zu Helmuth Plessners Projekt einer "Ästhesiologie des Geistes" nebst einer Plessner-Ineditum, Alber, 1998, S. 17.
- (8) Plessner, Selbstdarstellung, ibid., S.312.
- (9) Hans-Ulrich Lessing, ibid., S. 19ff.
- (10) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, Gesammelte Schriften IV, Suhrkamp, S.18~19.
- (11) Ibid., S. 9.
- (12) Ibid., S. 9.
- (13) Plessner, Selbstdarstellung, ibid., S. 318.
- (14) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 10.
- (15) Plessner, Die Grenze der Gemeinschaft, Gesammelte Schriften IV, Suhrkamp, S. 12.
- (16) Plessner, Selbstdarstellung, ibid., S. 321.
- (17) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S.37.
- (18) Ibid., S. 38.
- (19) Ibid., S. 38.
- (20) 例えば、Henri Bergson, L'évolution créatrice, Quardrige, Presses Universitaires de France,p 363 ff (アンリ・ベルグソン『創造的進化』、真方敬道訳、岩波文庫、四二四頁以下)を参照されたい。
- (21) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 43.
- (22) Oswald Spengler, Der Untergang des Abendlandes, Deutsche Taschenbuch Verlag, S.234 ff (オスヴァルト・シュペングラー『西洋の没落』、上巻、村松政俊訳、五月書房、一七五頁以下)を参照されたい。
- (23) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 47~48.
- (24) Ibid., S. 49.
- (25) Max Scheler, Die Stellung des Menschen in Kosmos, Gesammelte Werke, Band 9, S.10.
- (26) Arnold Gehlen, Der Mensch: Seine Natur und seine Stellung in der Welt, Teilband 1, ibid., S. 9.
- (27) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 61.
- (28) Ibid., S.123.
- (29) Ibid., S. 63.
- (30) Ibid., S. 61.

- (31) シェーラーは例えばこう述べている。「その〔行動〕概念の価値は、それが心身的に無差別な概念であるということにこそある。」(Max Scheler, *Die Stellung des Menschen in Kosmos*, *ibid.*, S. 17)
- (32) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, *ibid.*, S. 70.
- (33) シェーラーによれば「人間の研究にたずさわる特殊諸科学は次第に増えてきているが、それらの科学はどんなに価値があるにしても、人間の本質というものを解明するというよりも、むしろはるかにこれを覆い隠してしまう。」(Max Scheler, *Die Stellung des Menschen in Kosmos*, *ibid.*, S. 11) またゲーレンもこう述べている。「だから、『人間とは何か』を問うことは哲学のテーマであって、同様に人間にたずさわっている個別諸科学のテーマではない。」(Arnold Gehlen, *Der Mensch: Seine Natur und seine Stellung in der Welt*, Teilband I, *ibid.*, S. 9)
- (34) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, *ibid.*, S. 62.
- (35) *Ibid.*, S. 65~66.
- (36) *Ibid.*, S. 62.
- (37) *Ibid.*, S. 76~77.
- (38) Plessner, *Selbstdarstellung*, *ibid.*, S. 308ff.
- (39) Plessner, *Die Einheit der Sinne*, *Gesammelte Schriften III*, S. 13.
- (40) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, *ibid.*, S. 54.
- (41) *Ibid.*, S. 29. これは同上書 S. 158から引用された文章である。
- (42) *Ibid.*, S. 29.
- (43) 例えば『認知心理学の源流 ヘルムホルツの思想』、大村敏輔訳、17頁以下を参照のこと。不思議なことに、タイトルには明示されていないが、この訳書は Benno Erdmann, *Die philosophischen Grundlagen von Helmholtz' Wahrnehmungstheorie*, 1921の翻訳である。
- (44) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, *ibid.*, S. 49.
- (45) Plessner, *Selbstdarstellung*, *ibid.*, S. 322.
- (46) Dilthey, *Die Grundlegung der Wissenschaften vom Menschen, der Gesellschaft und der Geschichte*, *Gesammelte Schriften*, Band XIX, S. 60.
- (47) ゲオルク・ミッシュのこうした課題意識は、彼が編集したデイルタイ全集の第5巻 (*Gesammelte Schriften*, Band V) に寄せた長大な序文を参照されたい。なおミッシュは、デイルタイが示唆した精神科学と自然科学を両方とも基礎づけるような論理学の体系化をめざして生涯努力した。その苦闘の足跡は、彼の論理学講義録である Georg Misch, *Der Aufbau der Logik*, Verlag Karl Alber, 1994に見ることができる。
- (48) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, *ibid.*, S. 49.
- (49) Georg Misch, *Die Idee der Lebensphilosophie in der Theorie der Geisteswissenschaft*, in *Kant-Studien*, Bd. 31, S. 536~548を参照のこと。
- (50) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, *ibid.*, S. 60~61.
- (51) *Ibid.*, S. 68~69.
- (52) *Ibid.*, S. 10~11.
- (53) *Ibid.*, S. 11.
- (54) *Ibid.*, S. 18.
- (55) *Ibid.*, S. 167~168.

(おくや こういち 本学人文学部教授 哲学専攻)